



Title	国境を越えるケアワーカー－ライフコース選択と日・独・瑞の受け入れ社会との関係性に着目して－
Author(s)	チェリー, アンジェラー 未来
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/96198">https://hdl.handle.net/11094/96198</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏名 ( チェリー アンジェラー未来 )	
論文題名	国境を越えるケアワーカー —ライフコース選択と日・独・瑞の受け入れ社会との関係性に着目して—
論文内容の要旨	
<p>本研究の目的は、介護の人手不足が進む各国において打開策として期待される移住ケアワーカー（以降、移住CW）に着目し、彼ら彼女らの視点からケアのグローバル化を捉えることである。本研究の問い合わせは、移住CWたちが、異なる受け入れ社会においてどのようにライフコース選択を行い、自己実現していくことができるのか、そしてその中でどのような課題があるかについて明らかにすることである。</p> <p>序章の前半では、先行研究を踏まえ、本研究の位置付けを示した。本研究の特徴は(1)ライフコース視点を用いて、移住CWの主体性と制度や社会状況との関係性に着目すること、(2)フォーマルに雇用されて働く移住CWたちを対象とすること、そして(3)日本・ドイツ・スウェーデン3カ国の比較をすることの3点である。</p> <p>国境を超えた介護労働にはさまざまな形があるが、これまでの研究は、インフォーマルに雇用される住み込みのケアワーカーや介護労働まで担うことも多い家事労働者など特に脆弱な立場にある女性の移住労働者を中心に蓄積してきた (Christensen &amp; Gulsvik 2014; Parreñas [2001] 2015; 小ヶ谷 2016ほか)。これらの研究は、移住CWたちを脆弱な立場に追いやる構造を指摘すると同時に、その中でも構造に対抗する移住CWたちの戦略や主体性にも着目し、彼女たちが単なる犠牲者ではないことを示す。</p> <p>他方で、主にフォーマルに雇用される移住CWについては、労働者としての権利が保障されているとの認識から、彼ら彼女らの立場があまり問題視されてこなかった側面がある。しかし、近年は移住CWの国際的な人材獲得競争の中、そもそも自国を目的地として選択されないことが懸念されている。本研究は、これを、フォーマルに雇用される移住CWたちの戦略や主体的なライフコース選択が今まで十分に着目されてこなかったことに対する問題提起として捉える。また、本研究の問題意識は、フォーマルに雇用される移住CWたちについても「人」としての受け入れを検討する必要性があるというものである。</p> <p>序章の後半では、本研究の視点として用いるライフコース視点とは、個人の主体性と社会状況や制度との関係性に着目するものであることを示した。また、先行研究の整理から、移住CWたちにライフコース視点から着目することで、彼ら彼女らの移住に関する決断プロセスの複雑さや主観的な社会移動の多様なあり方を捉えつつ、それらを受け入れ社会における制度や社会状況と結びつけて理解することができると指摘した。</p> <p>本研究は、移住CWを取り巻く社会状況の異なる日本、ドイツ、スウェーデンの3カ国を比較し、それぞれの状況が移住CWたちのライフコース選択にどのように影響するかについて検討した。スウェーデンに着目することで、移民統合政策の充実とさまざまな教育を受ける権利が普遍的に保障されていることのライフコース選択への影響について検討した。また、ドイツに着目することで、受け入れの仕組みの柔軟性に加え、民間の人材会社や市民セクターの活動、コミュニティの存在などの社会資源がライフコース選択へ与える影響について検討した。日本は、スウェーデンとドイツと対照的に、受け入れの仕組みの限定性や移民政策の未整備が特徴であるが、そのことが移住CWたちのライフコース選択にどのように影響するのか検討した。</p> <p>本研究は、受け入れ社会の制度的背景の整理を整理した第Ⅰ部と、スウェーデン調査、ドイツ調査、日本調査を通して移住CWたちの主体性及びその制度的背景との関係性に着目した第Ⅱ部から構成される。</p> <p>「第Ⅰ部 移住ケアワーカー受け入れの制度的背景」は文献調査に基づく。エスピノ・アンデルセンの福祉国家3類型に基づく社会保障体制の特徴を踏まえつつ、第1章では、3カ国の介護サービスの仕組みについて、第2章、第3章では、移民政策や移住CW受け入れの仕組み等、3カ国の移住CWを取り巻く環境について記述した（日本については第2章、ドイツとスウェーデンについては第3章にて記述）。</p> <p>「第Ⅱ部 移住ケアワーカーの主体性への着目」では、3カ国で合計30人近くの移住CWと20人近くの関係者に実施したインタビュー調査とフィールドワーク調査の結果を記述した。その上で、第Ⅰ部で整理した各国の制度的背景と結びつけてライフコース視点から分析、考察した（スウェーデン調査については第1章、ドイツ調査につい</p>	

ては第2章、日本調査については第3章にて記述)。

終章にて3カ国の比較を行い日本への示唆と今後の研究の展開について述べた。

本研究の結果、移住CWのライフコース選択の可能性が以下のように受け入れ社会の制度や社会状況により異なることが明らかとなった。

スウェーデン調査では、移住CWたちにとって介護の仕事は「魅力的」であるのかという問い合わせようとした。難民・移民の背景を持つ人々は時間給職員（夏季休暇の代替職員を含む）に集中していたが、その労働環境は、人員配置の手薄さと業務量の多さなどがストレスとなっており、移住CWたちにとって魅力的であるとは言い難い状況であった。しかし、スウェーデンの普遍型社会保障体制が、移住CWたちに上昇移動していくための手段を提供していることを背景に、介護の仕事がそれぞれの人生設計の中における次のステップに進んでいくための出発点となっていた。その意味では、介護の仕事は移住CWたちにとって魅力があるといえた。

ドイツ調査では、トリプルワインを謳うドイツの柔軟な受け入れの仕組みにおいて、移住CWや移住ナースたちにとっての「ワイン」はどう実現されようとしているのかを明らかにしようとした。ドイツの受け入れの仕組みの柔軟さに加えて、民間の人材紹介会社の存在、ベルリンのベトナム人コミュニティと活発な市民セクターの存在は、フィリピン人ナースとベトナム人CWたちに様々なライフコースの選択肢を与えていた。スウェーデンの移住CWたちと同様に、ドイツの移住CWや移住ナースたちは、介護・看護の現場で、人員配置の手薄さや同僚との協力関係の構築に困難を感じていた。しかし、彼ら彼女らには、民間の人材紹介会社の支援により職場を変更する、あるいは、市民セクターの支援を受けることで、現在置かれた状況を改善して介護の仕事を続けるという選択肢があった。小ヶ谷（2016）の「移住家事労働者としての地位向上」（自身のスキルの向上や移住家事労働者自体の労働条件の向上）の表現を援用し、ドイツの民間の人材紹介会社と活発な市民セクターの存在は、「移住CWや移住ナースとしての上昇移動」の手段を提供していることを示した。ベトナム人CWたちには、ベルリンのベトナム人コミュニティを頼って介護の仕事（職業教育）を辞めるという選択肢もあった。これも移住CWたちの主体的なライフコース選択の一つ、そして「移住CWや移住ナースとしての上昇移動」以外の形で自己実現する可能性としても捉えられた。

日本調査では、複雑かつ限定的な受け入れの仕組みの中で、移住CWにはどのようなライフコース選択が可能であるのかを明らかにすることを目的とした。調査の結果、移住CWたちのライフコース選択の可能性は、受け入れ制度による制約を受けていたことが明らかとなった。インタビューした移住CWたちは、多くは、国家試験の壁により、将来の展望がなかなか描けていなかった。日本の移住CWたちは、多くの場合、介護福祉士の国家試験に合格できて初めて、規定の滞在年数（3～5年間）を超えて日本で介護の仕事を続ける、国内で他の職場に移る、家族を呼び寄せるなどの選択ができるようになる。また、市民セクターは、移住CWたちの主体的なライフコース選択の上で重要な社会資源となり得るが、日本では移住CWたちの介護現場以外のコミュニティが限られており、このこともライフコース選択の可能性の制限につながっていると考えることができた。日本においては「移住CWとしての上昇移動」には国家試験の壁があり、受け入れ施設や受け入れ調整・支援機関の体制次第で上昇移動の実現可能性が異なること、そして介護の仕事を続けること以外のライフコースの選択肢がなく、「移住CWとしての上昇移動」以外の上昇移動、自己実現のルートは用意されていないということが示された。

日本への示唆として、スウェーデンの事例からは、普遍的な（職業）教育の保障との責任の所在が明確になっていることが、そしてドイツの事例からは市民セクターの活動と移住CWにとってのコミュニティの存在が、移住CWたちのより主体的なライフコース選択を可能とする上で重要であることが示された。

本研究は、移住CWたちの視点からケアのグローバル化を捉えることを目的として、移住CWたちが、異なる受け入れ社会においてどのようにライフコース選択を行い、自己実現していくことができるか、そしてその中でどのような課題があるかについて明らかにすることを試みた。本研究からは、移住CWたちの主体性を尊重した受け入れ体制があることこそが、移住CWの人材獲得競争の中でも移住CWたちに目的地として選択される大きな誘因となるという仮説も導き出された。また、そのためには、移住CWたちに対する視点の転換と、柔軟なライフコース選択を可能とする体制の整備が求められることを示した。

本研究の今後の展望としては、移住CWの母国での経験も含め、より長期的なライフコースに着目すること、そして「グローバル化する介護現場でどのように良い介護を実現するか」「利用者は移住CWの介護をどう受け止めているか」についても国際比較の視点を持って議論していくことが挙げられた。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　(　　チェリー アンジェラ未来　　)		
	(職)	氏　名
論文審査担当者	主　查	教授　　齊藤　弥生
	副　查	教授　　山中　浩司
	副　查	准教授　中井　好男

### 論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、高齢化が進む国々における介護の人材不足を背景にケアのグローバル化が進むなか、異なる受け入れ社会において、移住ケアワーカーがどのように自己実現を目指し、どのようなライフコース選択を行っているのか、またその課題は何かについて、移住ケアワーカーの視点から明らかにしようとするものである。

本論文は全2部9章構成で、第Ⅰ部（3～5章）では、異なる福祉レジームに分類されるスウェーデン、ドイツ、日本における移住ケアワーカー受入れの制度的背景を詳細に整理し、第Ⅱ部（6～8章）では移住ケアワーカーを対象に3カ国それぞれで実施した質的調査の結果と考察をまとめ、最後に全体の結論（終章）である締めくくっている。本論文はライフコース視点、すなわち、移住ケアワーカーはそれぞれの国の制度や文化、慣習のなかで、主体的にライフコースを選択しているという立場で、一貫した議論を展開されており、受入れ制度と移住ケアワーカーの主体的なライフコース選択の関係性に着目する点は、制度論が中心となりがちな当該分野の研究のなかでも、ボトムアップ型のオリジナリティが高い論文といえる。

第Ⅰ部では、スウェーデン（社会民主主義レジーム）は難民受け入れに積極的である一方、移民ケアワーカーに特化した受入れ制度ではなく、難民背景がある人が介護の仕事に誘導される社会と分析し、ドイツ（保守主義レジーム）では送り出し国、受け入れ国、移民ケアワーカー3者にメリットがある‘トリプルWIN’の仕組みが試行されていて、フィールド調査に基づき、市民セクターにおいて移民の人たちの支援活動が活発であることを示している。受入れ後発国の日本では国家試験の壁、滞在年数、職場変更、家族の帯同等の制限が極端に多いことが、比較分析を通じて明確に示されている。

第Ⅱ部では、スウェーデンではシリア、イラク、エリトリア出身者、ドイツではフィリピン、ベトナム出身者、日本ではフィリピン、ネパール、ベトナム出身者という計30人、10か国出身の移住ケアワーカーを対象に質的調査を行い、その結果をライフコース視点で分析した。スウェーデンとドイツの移住ケアワーカーには、介護職としての教育機会が提供され、ケアワーカーとしての上昇移動の可能性も開かれており、またケアワーカーとしての上昇移動以外のルート、例えば、他職業への転職、大学への進学等の可能性がみられた。一方で、日本の移住ケアワーカーは受け入れ施設により手厚く保護されている面もあるが、日本社会における上昇移動の可能性や他の選択肢もないことを明らかにしている。

本論文では、どの国においても、移住ケアワーカーたちはそれぞれの制約のなかで、たくましく、ライフコースを選択する主体的な存在であることが示されていると同時に、受入れ社会の体制は移住ケアワーカーのライフコース選択に大きな影響を与えていていることを明らかにしている。そして本論文の結論は、移住ケアワーカーにとって上昇移動や自己実現を可能とする社会制度を築くこと、つまり「単なる労働力」ではなく「人」として受け入れることこそが、日本社会の人材不足を解消するカギになることを示すもので、日本の政策への有益な示唆を含む。

本論文は、文献調査や現地ヒアリングで収集した膨大な量のデータに基づく分析による国際比較研究である。コロナ禍という悪条件にもかかわらず、3か国の介護現場を丹念に訪問し、調査協力者を自己開拓し、外国語の運用力、コミュニケーション力が發揮された力作であり、最新の情報や希少価値のある情報も多く含まれており、社会福祉学、福祉社会学、社会政策研究をはじめ、関連研究領域に寄与する研究といえる。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値するものを判定された。